

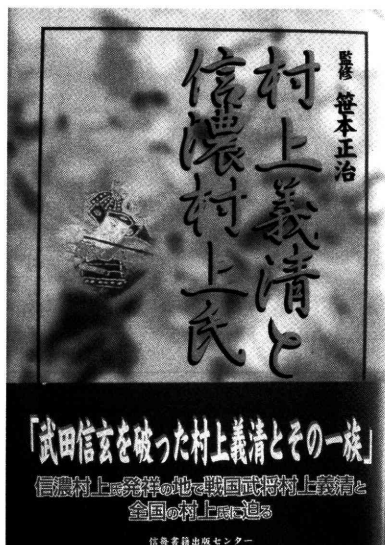
## 【書籍自己紹介】

# 『村上義清と信濃村上氏』 『高遠城跡ガイドブック』

笹本 正治

地域ブランド研究は地域住民が居住地や生まれ育った場所などに自信を持ちながら、豊かに生きていく手段の一つを探ることだと考える。それは地域おこしと呼ばれる動きとも重なる。ここでは私が監修し、平成18年（2006）3月に刊行された2冊の本を紹介することで、地域ブランド研究と長野県における地域おこしを結びつけてみたい。

『村上氏と信濃村上氏』は埴科郡坂城町が編集した本である。坂城町は「テクノの町」として全国的に有名で、テクノ分野で地域ブランドをなしている。平成17年に坂城町政は50周年を迎えたので、様々な形で記念事業がなされた。この町に関係した歴史上有名な人として、南北朝の動乱で活躍した村上義光と、武田信玄を二度にわたって破り、川中島合戦の契機をもたらした村上義清がいる。そこで、50周年事業の一環として、村上義光や義清などを輩出した村上氏をめぐってフォーラムを実施した。町民に町の過去や文化について認識してもらい、歴史に誇りを抱きながら、新たな町づくりに邁進しよう



という、精神的な町おこしである。

「信濃村上氏フォーラム」は平成17年11月12日から翌日にかけて行われ、11日にはフォーラムが、翌日には町内の史跡見学があった。この二日間の述べ参加人数は550名にもなった。これに先立って、8月27日には「信濃村上氏フォーラム事前学習会『みんなで語ろう村上義清』」を開催したが、こちらでも100名が集まった。本書はその両方の記録である。

目次は次のようになっている。

## 第一部 村上義清の世界

ふるさと坂城の名将 村上義清……町立坂城小学校

ふるさと坂城 村上義清調査隊の報告……町立南条小学校

### 第一部 パネルディスカッション

郷土の名将「村上義清」について……坂城町 齋藤真光

信州ゆかりの村上氏……福島県葛尾村 猪狩省造

上杉氏から見た村上義清……新潟県上越市 福原圭一

## 第二部 信濃村上氏の隆盛

校歌の歌詞から学んだこと……町立村上小学校

町内の遺跡から学ぶ信濃村上氏……町立坂城中学校

### 第二部 パネルディスカッション

瀬戸内海の手賊衆 能島村上氏の世界……愛媛県今治市 田中謙

因島村上水軍についての疑問……広島県因島市（現尾道市）  
今井豊

村上義光公、義隆卿の終焉の地……奈良県吉野町 田中敏雄

## 第三部 フォーラムのまとめ

村上氏をめぐる……コーディネーター 笹本正治

信濃村上氏フォーラム事前学習会「みんなで語ろう村上義清」

この催しの特徴として、私は三つを挙げたい。一つは、小中学生が多くの人を前に堂々と報告したことである。町の未来を造るのは子供たちであり、歴史を知る主体にも子供たちになって欲しいという願いから、子供たちに前面に出てもらったが、実にみごとに報告をしてくれた。二つは、全国から村上氏を縁にして人が集まったことである。三つは、事前学習会がなされ、町民がフォーラム以前から学んでいたことである。

この本はフォーラム全体を将来に伝えるために、そのままの形で文章化したものである。講演会やフォーラムなどはどこでも行っているが、やったままにしておく、やがては忘れられていく。将来に実施したことをいかに伝え、さらにその上に何を積み重ねていくかが大事だと考え、書籍化に踏み切ったのである。

次に後者の本に移ろう。高遠城と聞けば誰もが思い起こすのが桜である。その桜は城跡にあることによって人を引き付けているが、ほとんどの人が桜の舞台となるお城のことを知らない。そこで作られたのが『高遠城跡ガイドブッケー高遠城跡 この城をもっと知ろうー』である。本書は以下の目次からなっている。

第一章 高遠城の歴史……笹本正治（信州大学人文学部副学部長）

第二章 資料で読む高遠城の姿……丸山徹一郎（史跡高遠城発掘調査団長）、桐原健（前長野県考古学会会長）

第三章 高遠城と城下町の建造物……大川直躬（千葉大学名誉教授）

第四章 景観と植物……佐々木邦博（信州大学農学部教授）、菅原聰（信州大学名誉教授）

第五章 散策ルートとポイント……笹本正治

総カラーページで実に美しい。しかも、持ち運べるようにとページ

の割に薄く製本した。目次のように中には高遠城の概略が多方面から述べられているので、ぜひともこの本を手にとって高遠城跡を見学して欲しい。桜見物もより多角的になること請け合いである。

地域ブランドは地域の差別化を図ることでもある。その際、どこでも他所と違うと主張できるのは環境と歴史である。すべての地域は独自の歴史と文化を持つ。そうしたものといかに向き合い、誇りを抱きながら、継承、発展させていくかが地域おこしの原動力、地域ブランドの一つになると私は考える。その意味でテクノの町として有名な坂城町が、ついに歴史や文化に目を向け、文化を売り物にする時代になったかと感嘆した。しかし、この本はその最初の一步にすぎない、今後どのように文化を創り上げていくか、息の長い取り組みが期待される。坂城町の動向を見守っていきたいと思う。

一方、後者の本を作った高遠町は伊那市と合併して、町が無くなってしまった。私は高遠城跡の保存整備に関係して、昭和61年（1986）からこの町と関係してきた。私が書いたり監修をした本として、『高



遠風土記』（高遠町教育委員会、2004年）、『再発見 高遠石工』（ほおずき書籍、2005年）もあるが、この町は実に文化的な町であり、次々に文化的なサミットや勉強会を実施し、よく学ぶ町民が多かった。これから伊那市の一部となった時に、地域がどのようになっていくか、これまた注目したい。

なお、個人的な感想であるが、高遠町という実により響きを持った町名が消えたことに悲しみを覚

える。田山花袋は「たかとはは山裾のまち古きまちゆきあふ子等のうつくしき町」と詠じ、司馬遼太郎は「高遠、その地名の高雅さは、たかだかとした一幅の絵を見るようです」と書いた。町名になった地名にコウエンな気高さを感じる。

高遠は江戸時代に高遠藩の中心をなし、藩領域は伊那市域の多くを組み込んでいたが、中心部の移動により高遠町は伊那市に合併した。私が県外の人に接してみると、多くの人は高遠町を知っているが、伊那市の知名度は低い。特に高遠城の桜イメージは極めてよい。おそらく、全国的な知名度、地域ブランド名でいったら、高遠町は長野県下でも有数で、伊那市よりも上であったろう。地域ブランドは人口や面積の大小ではなく、歴史性の中から生まれた産物なのである。そうした地域ブランドともなっている地名をなぜ新市は、市町村合併にあたって取り込もうとしなかったのであろうか。市町村合併によって新たに付けられた名称を見ると、ほとんどのところで歴史性や地域性が追いやられ、どこでもあるような名前、似たような名称になってしまった。伊那市の場合は、前からの郡を基盤にした名前であるが、たとえば「伊那高遠市」といったように、地域ブランドを生かした名称を考えるべきではなかったろうか。名称を考える時、現に住んでいる人数の大小を越えて、どのように過去の財産を共有の財産にし、将来の発展につなげるかが大事である。この際にも、歴史や地域の文化を前提にしたい。その意味で既に作られた地域ブランド名は大事にすべきである。

(ささもと・しょうじ／信州大学人文学部教授)

『村上義清と信濃村上氏一坂城町信濃村上氏フォーラム記念誌一』  
(2006年3月15日発行、信毎書籍出版センター、全285頁、本体定価

1429円＋税)

『高遠城跡ガイドブックー高遠城跡 この城をもっと知ろうー』  
(2006年 3 月30日発行、高遠町教育委員会、全114頁、税込定価1200  
円)